極楽寺だより

2017（平成29）年11月号

発行所：極楽寺（浄土真宗本願寺派）〒759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬 3633 ☎0837-43-0625

秋の永代経法要のご案内

次の通りお勤めいたしますので、お誘いあわせの上、お参り下さいますよう、ご案内いたします。

十一月一日（水）
昼一時半 夜七時半

十一月二日（木）
昼一時半

講師 美祢市 明厳寺住職
中島 昭念 師

昼間お仕事の方は、ぜひ夜席にお参り下さい。

永代経法要とは

住職が子どもの頃は、山を走り回って遊んでいました。しかし、今は大人でもなかなか入ることができません。なぜなら、山に入る人がいなくなったことで、道がなくなってしまったからです。先に行く人が踏みしめる歩みによって、道はできるのです。私たちのところにまで、お念仏の教えが伝わってきたのも、先だってこの道を歩まれたご先祖があるから、志を納めお寺を護ってこられた先輩方があるからなのです。そして次に歩む者がなければ、道は途絶えてしまいます。永代経法要とは、永代にわたり伝えられたこのみ教えを感謝と共にいただき、永代にわたり伝えていこうという尊い営みなのです。

ご予定下さい

◇12月18日14時　仏婦報恩講
◇12月31日夜23時45分　除夜の鐘撞き
◇ 1月　1日10時　元旦会
◇ 1月14～16日　御正忌報恩講

お取越しの季節です

お寺にご連絡下さい。
日程を調整した上で、
お参りにうかがいます。

「お取越し」とは、親鸞聖人のご法事「報恩講」を、ご命日よりも取越して（早めて）各家々で勤めるという、真宗門徒にとって大切な伝統行事です。ところが近頃は、「どうして親戚でもない人の法事を、勤めなくてはならないのか！」と怒られそうな時代になりました。

しかし「お取越し」には、大切な意味と、尊い心が込められているのです。私たちのご先祖や先輩方が、長い歴史を通して届けて下さったその心を、深く味わい直していきたいものです。

お取り越しを
お勤め
しましょう
キャンペーン

「大きな心」と「小さな心」

近頃は「人間の器の大きさ」ということを言わなくなりました。「あの人は、器がでかい」と褒めることも、「お前、小さいヤツだなぁ」と嗜めることもなくなりました。「ハイリハイリフレ　ハイリホー　大きくなれよ」という丸大ハンバーグのＣＭ（１９７９年より放送）は、住職世代であれば誰もが知っている有名なものですが、「大きくなれよ」という呼びかけを、身体だけではなく人間的にも大きくなれと受け止めたのは、私だけではなかったはずです。そんなメッセージを、身近に聞くことができない時代になりました。大きな心で受け容れる生き方に憧れることも、小さい心で人を切り捨てる生き方を恥じることもないのは、世の中全体が委縮しているからなのかもしれません。

それは、「ロールモデルの不在」が原因ではないかと思うのです。「ロールモデル」とは、自分にとって、具体的な行動や考え方の見本となる人物のことです。人は誰でも無意識のうちに「あの人のようになりたい」というロールモデルを選び、その影響を受けながら成長するといわれます。私は若い頃、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』を読んで、「坂本龍馬のような、器のでかい人間になりたい！」と思いました。それは同時に、自分がまだまだ小さいなぁと思い知らされることでもあり、だからこそ世界の広さも見えてきたものでした。

丸大ハンバーグの CM

貧しい田舎の農家に生まれ、学歴のない身から総理大臣にまで登りつめ、政界に大きな影響力を持った田中角栄。１９６０年、社会党委員長の浅沼稲次郎が右翼の高校生に刺殺されたとき、彼は誰よりも早く、葬儀に駆けつけたといいます。

「なんであんな人のところ（葬儀）に行くの？」と、喪服を着て出かけようとした角栄に、小学生の長男は尋ねました。子どもながらに「社会党や共産党はオヤジの敵だと思っていた」からです。その時角栄は、真っ赤な顔をして「バカモン！」と息子を叱りつけました。

「考え方こそ違っても、お互い命をかけて国を良くしようと思っている仲間だ。その仲間が命絶えたんだから、仲間として弔ってやるんだ。よく覚えておけ！」

意見が対立する人をも、仲間だと言い切れる器の大きさ！もちろん田中角栄の評価は様々ですし、全面的に肯定するつもりはありませんが、やはりこの言葉は感動モノです。

今ならきっと、ネットやメディアで「詭弁だ」「政治的パフォーマンスだ」「誤魔化されるな」

田中角栄

とよってたかって貶めようとするでしょう。しかしその前に、「自分なら、こんなことが言えるのか」「誰よりも早く、葬儀に駆けつけられるのか」と自らを問うことがなければ、自分の器の小ささに気づくこともできません。自らを振り返ることもなく、小さな基準で人を切り捨てる。これでは、世の中縮こまるはずです。

同じ年の１９６０年、安保闘争が激化する中で、デモに参加した東大生の樺美智子さんが圧死するという事件が起こりました。抗議行動の反発はますます強まり、国会前のデモ行動には何十万人という人々が集まります。当時の岸信介総理は、死を覚悟したとも言われています。

農林省審議官・松任谷健太郎は霞が関にいた。／「審議官、お電話です」防衛庁長官の赤城宗徳からの電話だった。岸信介総理がデモ鎮圧に自衛隊を使うという、その要請をどうするかとのことだった。／健太郎は受話器をにぎりしめた。／「全学連といえども国の若者です。陛下の赤子を撃つなどもってのほか。銃口で政権を守ろうとしてはいけません。政権を守るのは人です。今しばらくは耐える時だと」

（次ページへ続く）

「松任谷君、承知した」
赤城は辞表を懐に岸の元に赴いた。
「総理、ご意向には添いかねます」。

（『愛国のノーサイド』延江浩）

「愛国」を声高に叫ぶ人が、同時に「反日だ」「非国民だ」「あんなやつら」と罵る光景を、よく目にします。同じ国民を切り捨てることが本当に「愛国」と言えるのかと、常々疑問に思っていましたが、松任谷健太郎は違いました。敵対する人々をも同じ「国の若者」だと、守ろうとしたのです。そして、松任谷の言葉に共感し、辞表をしのばせて総理のもとへ赴く赤城防衛庁長官。この器の大きさ！懐の深さ！圧倒されます。

私の尊敬する宮城顕先生は、**「その人の大きさは、出遇っている世界の大きさである」**と言われました。ならば松任谷健太郎の考える国とは、違う意見や立場の人をも包み込む、大きな世界をいうのでしょう。対して、自分と同じ意見でなければ「非国民だ」と切り捨てる「愛国」は…、小さいですよね。

親鸞聖人は、阿弥陀様の「広大無辺際」の心に包まれ生かされていたことに気づかれました。その心は、文字通り限りなく広く際もないほど大きな心です。広大な心に出遇われたからこそ、自らの心の小ささに頭が下がっていかれたのでしょう。それは卑屈になることではありません。世界の広大さと豊かさに気づかされることなのです。

親鸞聖人はご和讃に、

「罪障功徳の体となる　こおりとみずのごとくにて
こおりおおきにみずおおし　さわりおおきに徳おおし」

と示されています。

罪やさわり（＝障り　障害物）と功徳の関係は、氷と水のようなのだと。氷が多いほど溶けた水も多くなります。同時に、罪やさわりを深く自覚するほど、この私を願い続けて下さる阿弥陀様の功徳を、深く味わうことができるのだと教えられるのです。

自分が小さな世界に閉じこもっていれば、感動も、感謝も、出遇いも小さなものでしかありません。大きな世界に出遇うことで、「なんて小さな心で、人生を決めつけていたのか」「なんと薄っぺらな考え方で、人を決めつけていたのか」と知らされる。

そこから開かれた、より深く、大きな感動や感謝が、そのまま親鸞聖人の大きさを物語っているのです。

ただし、阿弥陀様の心は広大無辺際ですから、私が思うよりも、もっともっと広いのでしょう。私の言葉では語り尽くせぬほどの心です。だからこそ親鸞聖人は、安易に決めつけ矮小化することなく、いつも味わい、常に聞き続けていかれました。

私たちの先輩方は、親鸞聖人の生き方をロールモデルとし、大きな心と出遇い続ける人生を歩まれたのです。その歩みが、「お取越し」という行事に整えられ、私たちに届けられているのです。世界はもっと広大で、深く豊かなものであることに、気づいてくれよという願いと共に。

大きな心を見失い、委縮した時代だからこそ、しっかりといただかなくてはならないと、考えさせられることです。■

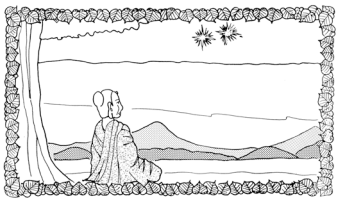
『声に出して、お念仏称えましょうキャンペーン』は、お休みします。

大津東組キッズサンガ お寺に泊まろう！

毎年恒例の「大津東組キッズサンガ」が、八月二十一～二十二日、極楽寺で開催されました。長門市の子どもたちが集まり、大騒ぎ！

お手伝いして下さった方々、有難うございました。子どもたちは、とても喜んでいました。

極楽寺近辺にお住まいの方、夜うるさくて、申し訳ありませんでした。



極楽寺掲示伝道
けいじでんどう

11月の言葉

便利な世の中になりました。パソコンはある、携帯電話はある、自動車もあるし、飛行機もある。自動で洗濯から乾燥までしてくれますし、掃除してくれるロボットまで市販されています。

これだけ便利な世の中になって、私たちの生活にゆとりができ、心豊かになったかというと、残念ながらそうではありません。いつでもどこでも呼び出されるような世の中になりました。できることが増えたことで、やらなくてはならないことも増えました。世の中全体がスピードアップすることで、イライラ度は増しています。まさに、物を使っているのか、物に使われているのか、よくわからないような時代に、どうも私たちは生きているようです。

私はここ数年、TVやスマートフォンのゲームから距離を置くようになりました。ゲームを遊ぶのは良いのですが、ゲームにもて↘

遊ばれているような気がするのです。暇つぶしにするのは良いのですが、気がつけば一生が暇つぶしに終わってしまいそうで。

こんなことを言うと、「何をしようが、それぞれの自由ではないか」という反論もあるかもしれませんが、仏教ではそれを自由と言いません。煩悩に縛りつけられて、身動きが取れない状態だと言います。

ゲームだけではありませんよ。賭け事に縛られている人もいれば、お酒に縛られている人もいる。怒りや不満、お金儲けや名誉、権力。様々なものに縛られて、自分を見失ってはいないでしょうか。そういう私も、「あれが欲しい」「ここに行きたい」「これをしなければ」と、それが本当に求めるべきものなのかも考えずに、暮らしています。もしかすると、自分を見失っていることにすら気づけていないのかもしれません。

現在、世界ではAI（人工知能）の研究が進んでいます。「今日は、何を着ていくか」「どこに旅行に行くか」「外食プランは」など、仕事に限らず、日常生活の様々な相談にAIが乗り、アドバイスをくれるサービスが既に登場しているのだとか。↖

しかし人工知能が発達することで、とても便利な世の中になるかと思いきや、何と多くの仕事がＡＩやロボットに取られてしまい、失業者人口が増えていくと指摘されているのです。

２０３０年には、全世界の雇用の半分、約二十億人の雇用が消えるのだとも言われていますし、国立情報学研究所の新井紀子教授は、「人間と人工知能が同じことをしたら、人工知能のほうが、仕事が早くて正確で、お金もかからない。いろいろな仕事はロボットに代替されてしまう」（『Educo』No.40）とまで言われています。

人間の暮らしを豊かにするはずの研究が、人間の仕事を奪い、尊厳を奪っていく。文字通り「物に使われる」時代がやってくるのです。ならば、研究しなければいいのにと思うのですが、「知的好奇心」「人類の可能性」、何より「経済成長のために」と、どんどん進められています。

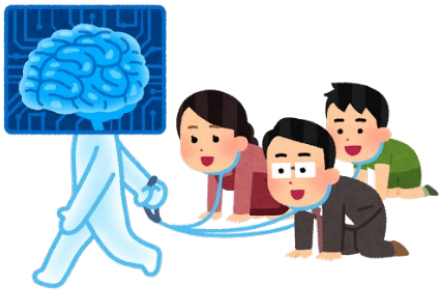
「原爆の研究開発も、同じであったように見える。物理学者アインマンの著書などを読むと、開発に加わった科学者たちが、面白い問題の解決としていかに喜々としてそれぞれの研究に励んだかが伝わってくる。技術が持つ他の面について考えるのは、↘彼らの仕事ではない。開発が終わった後で、多くの科学者たちが大変なものを作ってしまったと恐れ、あきれ、その使用阻止に走るのである。」

（『時代の風　科学技術の発達』総合研究大学院大教授・長谷川眞理子　毎日新聞２０１７年１月２９日）

世の中が便利になり、「できる」ことが増えた時代です。しかし、「できる」ということにもてあそばれ、煩悩に縛られて、自分を見失っている時代でもあります。だからこそ、「できるけれども、あえてやるべきではない」というブレーキも必要です。それには、謙虚に自らを振り返らなくてはなりません。そうでもしなければ、自分を見失っていることにも気づくことができないのですから。

今こそ自分の生き方を見つめ、「求めいく」方向から、「既に恵まれているものに気づく」「足ることを知る」という方向へと、向きを変えていくべきではないでしょうか。

仏教という教えは、長い歴史を通して、そのことを私たちに指し示して下さっています。■



10月の言葉

元々うっかり者で、忘れ物やミスの多い私ですが、五十歳を過ぎて、特にもの忘れがひどくなりました。さっきまで「これをしなくてはならない」と、強く思っていた用件を「あれ、何だったけ？」と思い出せないことが日常茶飯事です。

でも、私はそれを嘆いているわけではありません。おかげで、とても仕事が早くなったのです。

「今やっておかないと、絶対忘れる」と思うから、すぐに仕事に取りかかる。すると、手早く終わらせることができる。忘れっぽくなったことで、逆に仕事量が増え、失敗も少なくなりました。「後でやっておけばいいや」「いつでもできる」という思いは、今の私にとっては、慢心でしかありません。

陸上競技のスタートの合図を知らせるピストルには、微量の火薬を詰めた金属管である雷管が使われます。世界陸上の４００ｍハードルで銅メダルを獲得した為末大さんは、その雷管の箱に書いてあった言葉に興味を持ち、座右の銘のように使っておられるのだとか。

それは**「危険であることを認識しているうちは安全である」**という言葉です。危険だと思うから、注意する。だから危険だと思っているうちは安全だけれども、気を抜いて大丈夫だと思った時に、本当の危険が訪れる。あやまちを繰り返してきた私にとって、とても共感できる言葉です。

ギリシャの哲学者・ソクラテスは、「無知の知」真の知への探求は、まず自分が無知であることを知ることから始まるのだと言われています。大丈夫、知っている、わかっているという思いが、あやまちを繰り返していくのでしょう。同じところをグルグルと回っている。そんな有り様を仏教では「迷い」と言うのです。まずは、あやまちを繰り返す私であると気づくこと

からしか、何も始まりません。

迷いの自覚があるからこそ、道を求めるのです。つまり、道を求め始めたということは、既に仏様の智慧に導かれた歩みが始まっているということでもあるのです。深く受け止めなくてはなりません。

愚かにして愚かさを知るのは、

愚かにして賢いと

思うよりまさっている。（『法句経』）■

９月の言葉

ある人がご飯屋さんで食事をしていたときのこと。隣の席の学生が、友だちと話していたのが聞こえてきました。彼は最近、一人暮らしを始めたらしいのですが、部屋を決めるにあたって、周囲にどんな人が住んでるのかとても不安だったというのです。そこで彼は、何をしたのか。候補にあがったアパートの周辺住人の郵便物を盗み見て、名前をＳＮＳ（インターネット上で、日記やメッセージなどを通して、様々な人たちと繋がるサービス。）等で調べ上げました。そして、危なそうな人がいないことを確認した上で、安心して契約したことを、友だちに雄弁に語っていたというのです。

話を聞いていた人は、ゾッとしたといいます。なぜなら、こっそり人の郵便物を盗み見て、ネットで調べてって、お前が一番危ないだろう。そもそも自分がその危なさに

（次ページへ続く）

気付いてない。それが一番恐ろしい……。

私たちが知らないのは、実は自分自身の姿なのかもしれません。自分の危なさはさておいて、周りに対し警戒し、怯え、身構えているのかも。そうして周りを危険視している自分はどうなのかという思いを、どこかに持っておく必要があるのではないでしょうか。

アメリカでは、毎年のように銃の乱射事件や銃による犯罪が起きています。誰もが簡単に銃を買えることが問題なのではないか。銃を規制すべきでは、そんな声も上がっています。アメリカが銃社会であることには歴史的な背景もあるので、一筋縄ではいかないようですが、全米ライフル協会副会長を勤めておられた方の「銃を持った悪人に対抗できるのは、銃を持った善人だけだ」という発言には驚かされました。ここに大きく欠けているのは、「そもそも、自分は善人なのか」という視点です。現実に、誤射や過剰防衛の方が、銃で脅かされるよりも、はるかに多いのですから。

自らの悪や罪に対しての自覚がなければ、ブレーキはかかりません。悪いと知りながら、あえてする罪は重いことではありますが、知らずに犯している罪は、自覚がないだけに、止めどもなく深く相手を傷つけ、自らを貶めるでしょう。特に、周りを危険視しながら、自分の危険性を見失ってしまい、正義をかざし始めると、もう突き進むしかありません。

「自衛の意識は簡単に肥大する。解釈次第でどうにでもなる。かつて日本が戦争の大義にしたのは、欧米列強からのアジアの解放だ。ナチスドイツによるポーランド侵攻は祖国防衛が名目だった。ユダヤ人の駆逐はゲルマン民族を守るため。そもそもブッシュ政権のイラク侵攻も、大量破壊兵器を持つテロリストから世界の平和を守ることが大義だった。

人は自衛を大義にしながら人を殺す。」

（『すべての戦争は自衛意識から始まる』森達也）

自分だけが正しくて、人は間違っているという考え。自らを過剰に評価し、思い上がる姿を、「慢」と言います。仏教が教える煩悩の一つです。自らに捉われ人を軽んじることは、迷いを深め、

他を損ない、自らを損なうことになるのだと教えられているのです。自らの危うさ、愚かさ、至らなさと向き合うからこそ開かれる世界を、示して下さっているのです。

東京大学名誉教授で宗教学者の島薗進先生は、人間は、人生において自らの限界に向き合わざるをえない現実を突きつけられた時に「いのちの痛み」を感じる。宗教とは、その「痛み」を機縁として、「限りある人間のいのち」を超える尊いものとの出遇いを促すものだと言われています。

いつまでも生きていくことはできないという「死」の現実。
いつも、いつまでも強い自分ではいられないという「弱さ」。
人生は、思い通りにはならないという「苦難」。
そして、
自分はいつも正しいとは限らないという「悪」の自覚。

そんな「死」「弱さ」「悪」「苦難」という自分の人生の現実に直面した時、それを機縁として「人間のいのち」を超える尊い世界との出遇いが開かれる。その出遇いを促すのが宗教なのだと。

「いのちの痛み」を感じた時こそ、自分の思いを超えた世界に生かされ、受け容れられ、許されている姿に気づかされる。「いのちの恵み」や人生を生き抜く勇気を感じることができるのだと言われるのです。

（『宗教を物語でほどく～アンデルセンから遠藤周作へ』島薗進）

親鸞聖人のご一生は、人間の現実と向き合う中で、「悪人」「愚者」の自覚を持ちながら、阿弥陀様の恵みである「他力」と出遇われた、尊くも豊饒なる歩みだったと言えるでしょう。

自分自身の本当の姿を見つめることは、「いのちの痛み」を伴います。しかし、向き合うからこそ「いのちの恵み」を感じ、本当の人生を歩むことが始まるのだと、教えられるのです。

同時に、本当の姿から目をそらす生き方は、迷いを深める生き方なのだということも。■

極楽寺だより
2017(平成29)年11月号

平和の鐘を撞きました

今年から、八月十五日の盆法座は『魚法会』と『戦争犠牲者追悼法要』を兼ねた『いのちを尊ぶ法要』として勤め、平和への願いを込めて、皆さんと鐘を撞くことにしました。私の尊敬する宮城顕先生は、「平和とは、平等に相和するということだ」と言われています。すべてのいのちが平等であり、互いのいのちを尊び合うことを「平和」というのだと。

現代社会は、役に立たない（儲けにつながらない）ものは、必要ないと切り捨てる時代です。いのちさえも同様に扱われてはいないでしょうか。平和への願いを込めた鐘の響きを感じながら、深く考えさせられました。■

お知らせ

元総代長の宮崎茂之さん、元世話人の安野高男さん、松浪敬弐さんがご往生されました。長い間お世話になりました。ありがとうございました。

極楽寺ホームページ こつこつ更新中

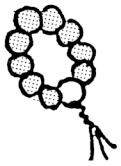
極楽寺.com で、検索して下さ

極楽寺だよりを送りませんか

都会に出ておられる子どもさん、お孫さんたちへ。有縁の方々へ。お寺へお申し出下さい。直接郵送します。送り先が増えると、住職はうれしいのです。

お寺まで、お持ち下さい。

お念珠
修理いたします



住職のつぶやき

❏ 今年も、広島カープが優勝！二連覇です。（今年はなんと、二軍も優勝を果たしました！）今シーズンは毎試合超満員で、一試合しか見に行くことができませんでした。いつでも気楽に見に行けた時代が、懐かしくもあります。❏ お金のない球団が、自前の選手を育て、金持ち球団をやっつける。私はこのストーリーを、息苦しい現代社会における一服の清涼剤のように感じました。❏ 近頃は、目先の利益を追い求めることで、「育てる」「成長を待つ」ということが見失われているように思います。しかし、誰もが、周りの人に我慢してもらい、許してもらい、待ってもらうことで、育てられてきたはずです。カープの優勝は、私たちが忘れがちな大切なものを思い出させてくれたのではないでしょうか。

❏ ちなみに、若い投手陣をやりくりした畝投手コーチも、二軍の水本監督も、選手としては芽の出なかった人たち。カープは、コーチも育てているのです。そんなカープが、私は大好きです。❏ あぁ、カープファンに生まれて、良かった！（ここは、ブルゾンちえみ風に読んで下さい。）■